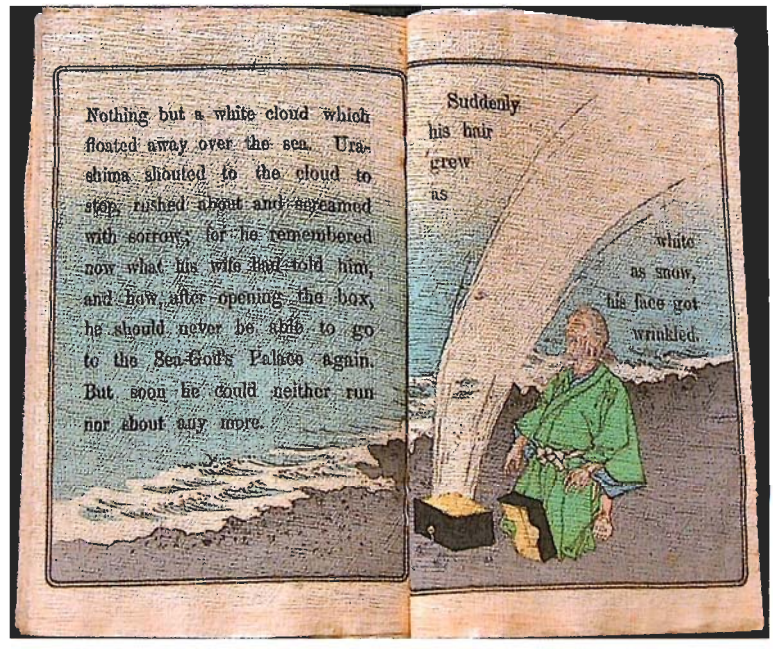
特集　ラフカディオ・ハーン

ラフカディオ・ハーンとギリシア神話

里見繁美

ハーンはわずか二歳にしてギリシアを離れたが、その後生誕の地のことには大きな関心を寄せていた。幼くして離れたからこそ、また四歳にして母親がギリシアに帰ってしまったからこそ、以後二度と戻ることのないギリシアに対してより意識的になり、望郷の念が募ったと考えることもできる。中でも、ギリシア神話に関連したものに接したり、あるいは耳にしたりすると、敏感に反応するのであった。具体的には、日本での最初の赴任地・出雲が「神々の地」「日本民族揺籃の地」であることを知り、同じく神々の国ギリシアとの類似性をこの地に見出してハーンは喜び、ますます日本贔屓に拍車が架かっていったことは周知の通りである。ハーンが意識するこうしたギリシア神話との関連性を色濃く示すものの中から、熊本を描いたハーンの作品の一つ「夏の日の夢」を例に取り上げて、ギリシア神話との類似性について分析してみることにする。



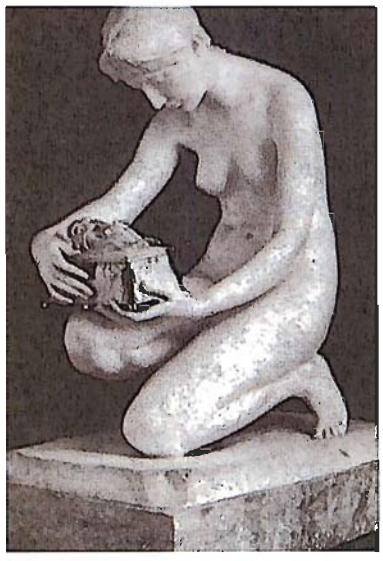
THE FISHER-BOY URASHIMA.

「夏の日の夢」という作品は、長崎旅行からの帰りに三角の「浦島屋」という宿屋でハーンが休憩する場面から始まり、「浦島」の話、「若返りの泉」の寓話へと展開していくものであるが、実はギリシア神話とオーバーラップする点を幾つも持っているのである。というよりも、これらの話の中にハーンはギリシア神話との関連を強く意識していたと思われるのである。特に、この作品の中でハーンが分析する「浦島」の話には、ギリシア神話からハーンが得たと思われる寓意が散りばめられている。ハーンが「浦島」の話をこの上なく気に入っていた背景には、明らかにギリシア神話との類似性を見出していた節がある。先ずこの作品の中で、裏切り行為をした浦島をハーンは厳しく咎めている。何故かと言えば、竜宮城で結婚をした乙姫から「開けてはいけない」と言われた「玉手箱」を「好奇心」から開け、「年老いて」しまうからである。やがて安楽のうちに亡くなり、浦島明神にさえなる浦島であるが、そうした行動を取った浦島に対して、ハーンは以下のような判断を下す。

西洋だったら話はまったく違ってくる。西洋では神々に背いたら、生きながらえて、最大の悲痛をその極みの果てまで味わい尽くさなくてはならない。一番よい時期に安楽そのままの死を遂げるなど許されるはずがない。いわんや死後自ら小さな神となることにおいてをやである。現身の神々の間に一人だけかくも長いこと生き続けている事実を前に、どうして浦島の愚かしさを憐れむことが出来ようか。(『日本の心』講談社学術文庫)

一般的に日本人は浦島に対して同情を寄せる傾向にあるが、ハーンは上記の引用のようにそれを疑問視するのである。では、ハーンのそうした考え方は一体どこから来るのであろうか。それは明らかにギリシア神話を念頭においた判断と思われるのである。具体的には、プロメテウスが人間を造り、人間に火を与えた場面から、ヘラクレスがプロメテウスを救う場面までを想起してみたい。もちろん全く同じではないが、両者は重なる部分を多く持つのである。キーワードは「神」と「過ち」ということになる。

ギリシア神話のそのくだりでは、人間に火を与えたプロメテウスおよび火を受け取った人間を罰するべく、ゼウスは初の女性パンドラを造って「箱」を持たせて、地上に送り込む。ところが、「ゼウスからの贈り物にはくれぐれも気をつけるように」とのプロメテウスの忠告を無視して、弟のエピメテウスは見目麗しいパンドラに魅せられて彼女と結婚をしてしまう。更には、その娶ったパンドラが今度は天上の神から贈られた、「決して開けてはいけない」と贈り主から言われた箱を「好奇心」から開けてしまい、「老い」を始めとするさまざまな災いを人間界にばら撒くことになるのである。挙句の果てには、プロメテウスはそうした罪を問われて、山の頂に縛りつけられて、はげ鷹に肝臓を啄まれ、永遠の苦しみを味わうということになってゆく。



パンドラの像

神から贈られ、しかも「老い」が入った、「開けてはならない」と忠告された「箱」を共に開けてしまうパンドラと浦島。その結果、ギリシア神話の世界では、人間界に災いが蔓延り、苦との戦いが始まり、またプロメテウスも長年の苦しみを味わっていくことになる。ところが、他方、浦島はどうかといえば同じ行動を取りながらも、その後何の苦もなく亡くなり、浦島明神にさえ成り行く。日本人が考えるように、「一体浦島を可哀そうに思うのは正しいことであろうか」とハーンは疑問を投げかける。「西洋では神々に背いたら、生きながらえて、最大の悲痛をその極みの果てまで味わい尽くさなくてはならない」からである。ハーンはこの問題を考えながら、やがて日本人が何故浦島に同情を抱くのかをこの作品の中で探っていくことになるが、そうした考察の大前提として、ハーンのギリシア神話に対する認識がこのように潜んでいたのである。

この作品は更に、ハーンが長浜に差し掛かると「若返りの泉」の話をふと思い出す。ある老夫婦が若返りの泉を飲み過ぎて若くなり過ぎてしまったという話であるが、ハーンは「浦島」の話に思いを馳せた後では、この話の寓意は以前にもまして疑わしくなってきたと結論付ける。確かに、そうかもしれない。浦島が「老い」の入った箱を開けてしまった後であるから、人間は年を取っても、決して若返るはずはないからである。ましてや遥か昔パンドラが「老い」の入った箱を既に開けていたのであるから。それゆえ、この話には寓意性にますます欠けるということになるのである。

ハーンは更にこの作品の最後において、「神」との約束を頑なに守ろうとする。つまり、浦島屋の女将（竜宮城の乙姫）とした約束である。宿屋を出る時に、女将はハーンに「俥屋には七十五銭をお支払いください」と告げた。ところが、俥屋は予定の二十五マイルを走らなかった。だが、ハーンは俥屋に七十五銭を支払った。ハーンの理由は以下の通りである。

「七十五銭とあの人は言いました」それから私はこう言葉を続けた。「なるほど初めの約束は果たされておりません。でも七十五銭お払いいたしましょう。私は神様がこわいのです」

浦島は乙姫との約束を守らず箱を開けてしまったからこそ老いて、二度と乙姫のもとに帰ることができなくなったが、ハーンはギリシア神話をより意識して、神々に通じる乙姫との約束を固く守ったのである。

ハーンの作品には、このように神との約束も含めて、約束を守ることの重要性を示すものが実に多く見られるのである。

＊さとみ　しげみ
文学部助教授

注１：THE FISHER-BOY URASHIMA. の画像はちりめん本「浦島」弘文社1886より引用。
注２：パンドラの画像は「ギリシア・ローマ神話事典」大修館書店1990より引用。

【表紙の言葉】

今回の表紙はハーンの没後30年を記念して出版された「妖魔詩話 JAPANESE GOBLIN POETRY」小泉一雄解説・編，小山書店1934 です。

トピックス さまざまな地域連携

今年も開かれた図書館としていろいろな協力・活動を展開しています。

■養護学校の職場体験

６月29日(火)から７月１日(木)まで、教育学部附属養護学校高等部の生徒２名が職場体験学習。

■図書館情報学の実習

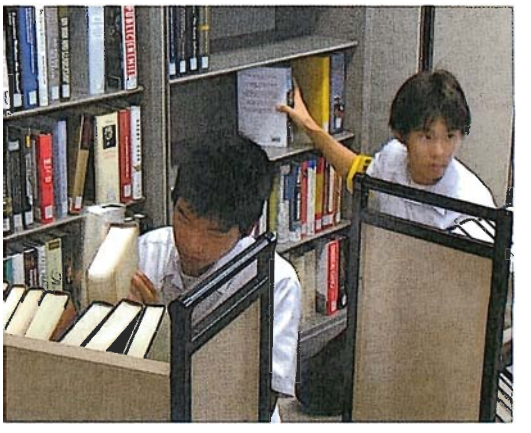
８月９日(月)から８月27日(金)まで、筑波大学の依頼により同大学生１名が「情報の収集、処理、提供に関する業務の実際を理解」すること等を目的として実習。

■小学校教諭の見学

８月19日(木)、熊本市小学校国語研究会の教諭20名が附属図書館の「特色や有効的な利用の仕方」を学ぶために見学。

■インターンシップ（就業体験）

８月23日(月)から８月27日(金)まで、法学部学生２名が「様々な分野で活躍できる優秀な人材」となること等を目的として就業体験。

■中学校の職場体験

９月14日(火)から９月17日(金)まで、熊本市立桜山中学校の生徒４名が職場体験。